

「眞言秘密の行でもつて、俺は絶えなんとする自分の生命を、無理強ゐに保持してゐるのだ」  
勿得恐怖、如等應當、一心稱觀世音菩薩。

兎に角大變な勢ひで、自分の内なるものと戦つてゐる最中に、巡査が一人靴を穿いたまゝ、僕の傍らに來て立つた。

手帳様のもを出して、「オイ」とか何とかヌカす。

僕は睨み付けて、飛び掛からんとする氣勢を見せたのだ。

すると巡査は矢庭に組み付いて來た。

一しきりもみ合つてゐる中に、僕の太股から血が滴り出した。

巡査が持つてゐた万年筆の尖を突き刺したのだ。

僕はひるまなかつたけれど、

「着物を着たまへ、風邪を引くから」とか、巡査がやさしく言ひ出したので、それにつられて着物を着せてくれたりするので厭がりながらインパネスも元通り來て、靴を穿いて外に出た。

矢張り巡査が追いて來るので、木刀を振りかざして脅やかすと、三間ばかり離れて後から來る。